

## 今月の谷口雅春先生のお言葉

# 夫婦の調和が家庭を明るくし、子供を善くする

夫唱婦和は宇宙の法則

先年の夏、穂田の私の宅へ来られた親子三人連れの人がありました。六、七歳の子供が耳の上じゅう繻帯をしている。どうしたのかと尋ねると、中耳炎で一カ年も繻帯して薬を注しているが膿がいつまでも出て治らず、段々その子供さんの耳が遠くなつて来るといわれるのです。それで私はその母親の方に「あなたは御主人に絶対服従なさい。あなたは良人を尻に敷いて、言うことをきくまいと思っっている。その聞くまいと思う心が子供に映

って中耳炎を起しているのだ。」とこういつてあげた。すると、その奥さんは本当に良人に服従する心になれらると、子供の耳が翌日はすっかり治っていたのであります。これはその家庭生活が宇宙の陰陽の法則に反していない、女の方が出しやばつていて男を従えていたから、(中略)耳漏の子が出来ていたのであります。それですから、どうしても天地の法則は夫唱婦和でなければならぬ。夫唱婦和であつて初めて調和した陰陽の家庭が出来るのです。総ての行動をするには男が主になつて外に積極的に進出し、女性は内部にその活力を包んで、男の働く力の源泉を生み出すようにしなければ本当に善きことが成就

しないという宇宙の法則が『古事記』に書いてあるわけ  
であります。(中略)

これが宇宙の法則であります。先ず夫唱え、婦これ  
に従うでなければならぬのであります。良人に反抗し  
たり、良人を尻に敷くような気持がありますと、それが  
子供に反映して、子供が中耳炎を患ったり、薬剤ではど  
うにもならない湿疹に苦しむことがあります。これは事  
実であるから仕方がないのであります。

(新編『生命の真相』第21巻128～130頁)

### 夫婦が円満になれば子供は善くなる

家庭の夫婦関係がどうもおもしろくゆかないというこ  
とをよく言われますが、そういった状態も夫婦互いの実  
相を観、それを言葉の力で賞めることによって善くなり  
うるのであります。たいていの場合、夫婦関係がよく  
ないというのは、奥さんが良人をほめないからであり

ます。(中略)奥さんはなかなか良人を賞めることをし  
ない。それから良人は妻を賞めたら甘いように思っ  
ている。よくうちの良人は直ぐ腕力を揮う、野蛮人など  
と違って攻撃する奥様がありますが、そういう奥様は腕  
力こそ揮わないが、心で常に良人をなぐりつけている。  
「良人は悪い人だ、つまらない人だ」と心の腕力でなぐ  
りつけている。良人は形の腕力でなぐりつけると、奥様  
は心の腕力でなぐりつける。心の腕力の方が眼に見えな  
いから陰険なのであります。この反対に良人は妻を賞  
め、妻は良人を賞め、互いに賞め合う言葉の花を咲かせ  
て円満にしてゆけば、単に夫婦仲だけではなく、家庭全  
体がよくなり、延いては子供までも良くなってゆくので  
あります。今日ここにいらっしやる皆さんの中にも、い  
ろいろ方法をつくしても、子供が達者にならない、とい  
うような御家庭はありませんか。省みてごらん下さい、  
そういう家庭はきつと夫婦仲が悪いものであります。そ  
れを省みて治されたら、きつとお子さんはよくなるので

す。  
〔『生命の實相』頭注版第25巻43〜44頁〕

### 光り輝く善そのものの実相をみる

人間の实相は「神の子」であり、「仏子」であり、ミコトであります。吾々は吾々の良人の中に、妻の中に、その実相を見て家庭生活を営まねばならないのです。吾々は、互々の人格のうちに「神の子」を見、「仏子」を見、ミコトを見て尊敬しなければならぬのであります。一旦迎えた良人なり妻なりは外面に現れた現象がどうあろうとも、その現象の悪さを以って、良人そのもの、または妻そのものの悪さと思つてはならないのであります。ジャン・バルジャンが盗みをして盗みをしていない本来善い人間であるところの实相を見て、遂にジャン・バルジャンを善人にしてしまった彼ミリエル司祭のように、吾等は良人又は妻の本来「神」なる実相を見なければならぬのであります。出来るだけ妻は

良人の、良人は妻の、欠点を見ないように、暗い方面を見ないようにしなければならぬのであります。肉体的間は「実相仏」ではないから、時には躓くことも、実相が蔽われて悪く観えることもあります。しかしその悪さを実在であると思わないことです。その悪さはやがて過ぎ去り行くべき仮り、その迷いの雲だと思ひ、光り輝く善そのものの良人又は妻の实相を観るように心掛けよ。たちまち、その悪さは消え行きて本来「神の子」なる良人又は妻の实相が輝き出て、家庭は異常に光明化されることになるのであります。

良人又は妻の善さはどれだけ深く信じてても好いのです。信じて信じ過ぎるといふことではないのであります。信ずれば信ずるだけ光を放つのです。

（新編『生命の實相』第24巻128〜130頁）